



にいがた
勤務医ニュース

発行所
新潟県医師会
新潟市中央区医学町通2-13
TEL 025(223)6381

若手医師の視点から 新潟の医療を考える

新潟県医師会 理事 齋藤 昭彦



新潟県医師会では、若手医師が主体的に医師会が取り組むべき課題や対策について考えることを目的とし、初期研修2年目の医師を対象とし、研修医奨励賞の募集を2019年度より実施してきました。6回目となる2024年度も、これまでと同様、「臨床研修での経験を踏まえた、新潟県並びに我が国の抱える課題、それらに対して今後医師会に期待される役割等に関する提言」をテーマとし、募集を行いました。

その結果、今年度の応募者は14名で、医学振興委員

ばれました。兵庫出身の千手医師は、医師不足解決のために、医師不足の現状を社会に知らせることで、地域医療の魅力を広く発信し、将来的に医療を担う若者の関心を引くことが重要であるという考えの基、研修医、医学生や小中高生などを対象に多彩な活動を実施され、その素晴らしい成果が発表されました。新潟県医師会に対しては、若手医師を中心とした支部会の設立を提案し、若手医師のエネルギーと医師会の組織力を融合化と持続可能性向上に寄与したいという、大変素晴らしいご提案を頂きました。熱意にあふれたプレゼンテーションも非常に効果的で、聴衆をひきつけるご発表でした。

優秀賞には、馬源先生(下越病院)の「外国人医師の活用で構築する地域医療の未来」、澤田泰成先生(糸魚川総合病院)の「糸魚川総合病院での初期臨床研修から考察する今後の上越地域医療のあり方」、芳中亮太先生(佐渡総合病院)の「2025年問題の先へー2040年の世界からの提言ー」の3件が選考されました。いずれも異なる視点からの素晴らしいご発表で、医師会に対する素晴らしいご提言を頂きました。

ご応募いただいた2年目の初期研修医の皆さんが新潟県の医療について考え、医師会への提言を考えたことは将来の皆さんの医師としてのキャリアに必ず役に立つものと思います。今回、残念ながら選考されなかった研修医の先生方のご提案も大変素晴らしいもので、今後の医師会活動の参考にさせていただきます。改めて、お忙しい中、ご応募頂き、ありがとうございます。

新潟県医師会の活動は幅広く、それらを通して社会貢献するきわめて重要な役割を果たしています。また、医師の生涯教育など、医師を育てる活動も積極的に実施しております。若手医師の皆さんには、この賞への応募という機会を通して医師会活動の一端を知っていただき、医療の諸問題を主体的かつ積極的に考え、行動する次世代の医療者になっていただきたいと思っています。今後も、医療が抱える様々な課題への解決法、改善点など、積極的なご意見をいただければ幸いです。

この奨励賞は今後も同様のスケジュールで継続されますので、より多くの研修医の先生方に応募していただき、多くのご提言を頂きますと幸いです。また、医師会の先生方には、臨床研修の中で、若手医師が新潟県の抱える医療問題に関心をもち、考え、議論できる環境を作っていたいただき、彼らへの継続的な指導を今後ともよろしくお願いいたします。

外国人医師の活用で 構築する地域医療の 未来



背景… 20年前、日本医師会総合政策研究機構の前田(2003)は、「医療特区」が企業や患者にとつて機会拡大の恩恵をもたらす可能性があると考えていた。「医療特区」を効果的に実施することで、戦略的な医療人材の確保、医療過疎地の医療体制の整備、国際医療事業の展開といった取り組みが期待される。

現状…新潟県は、医師を確保するために新潟大学医学部と連携を強化するとともに、さまざまな支援策を展開している。具体的には、新潟県医師養成修学資金貸与制度や臨床研修病院見学・実習会交通費支援、さらに臨床研修医奨励賞制度や特定診療科奨学金制度など、多岐にわたるサポートを提供している。

これらの取り組みの結果、近年県外出身の研修医が増加し、2024年度には研修医総数が過去最多の161名となった。しかし、マッチング結果と研修医数を比較すると、2023年以降、マッチング者と研修医数の間に乖離が生じており、二次募集や三次募集で新潟県の臨床研修を選択する県外の医学生が増加している可能性がある。気にならるのは、臨床研修を修了した後、彼らが新潟県内で専門医研修を継続し、地域医療に貢献するのかどうかである。

問題点…「新専門医制度」は2018年4月に導入されたが、専門医資格を取得するメリットが十分でないと感じる医師も一定数存在する。しかし、専門医資格を取得する選択肢自体は、個人のキャリアプランニングにおいて今後の進路に大きな魅力を持つ。

新潟県では、新潟大学の各診療科が専門医プログラムを整備しているが、大学の医局に属さない臨床研修医が専門医資格を取得するためには、市中病院のプログラムを選択する必要がある。しかし、新潟県内の市中病院には専門医が少なく、研修医が自由に選択できる環境にはないのが現状である。

医師不足に立ち向かう 若手医師の挑戦…若手 医師支部会設立の提案

下越病院 千手 孝太郎



月から新潟県の下越病院で研修医として研鑽を積んでいる。住んだことのない新潟県での勤務は、地域住民との距離感の近さからやりがいを感じられ、限られた医療資源の中での実践的で手厚い臨床研修を魅力に思っていることから、医師3年目以降も新潟に残り、町立津南病院(総合診療科専攻医として勤務する決意をした。しかし魅力の一方で、致命的な医師不足を日常診療でも痛感し、この大きな医療課題に貢献しなければと

感じていた。本稿では、これらの経験を踏まえ、新潟県および日本の医療が抱える課題と、医師会に期待される役割について考察する。

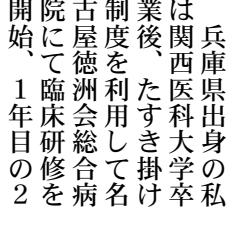
日本全国を見渡しても著しい医師不足を解決するには、まずは現状の医師不足を社会に認知させ、地域医療の魅力を広く発信し、将来的に医療を担う若者の関心を引くことが重要である。この目的のため、2024年の2月から1年間、医学生や小中高生を中心に多角的なイベントを実施した。

勤務地としての魅力発信のため、病院説明会を11回実施(県主催3回、リクルート会社主催5回、独自イベント3回)、下越病院を中心とした新潟県で研

修するメリットなどを挙げたプレゼンを計231人に個別に行った。魅力を周知したことで下越病院での2021年度の医学部の見学者数29人から2024年度は58人と2倍に増加。1次マッチングのマッチング者数は2人から過去最高の6人に増加した。また、新潟県主催のアンマッチ者対象イベントにも登壇し、個人面談を通じて県外学生4人を新潟県の臨床研修病院に内定させた。

地域医療を肌で感じてもらうイベントでは、津南病院をフィールドに「津南医療未来会議」を3回実施。臨床研修病院の院長らを講師に招聘し、県外医学生ら計58人と地域医療が抱える現実について議論した。地域の文化にも触れ、住民の方と話す機会を設けたことで、地域医療への関心と勤務する意欲が向上したことが事後アンケートより

研修医から医師会への提言



兵庫出身の私は関西医科大学卒業後、たすき掛け制度を利用して名古屋徳洲会総合病院にて臨床研修を開始、1年目の2

示され、またZエスや新潟日報など複数のメディアに取り上げられ、地域医療の魅力発信に寄与した。

小中高生に対して、キャリア授業(3回48人)、多職種体験(1回24人)、医師体験(4回28人)、大学受験対策の模擬面接(1回5人)など、計105人にキャリア教育を行った。小学校ではキャリア学習授業の一コマを担当。「自分からチャレンジしようと思った」「ますます医療への興味が深まった」などの感想をいただいた。中高校生へのキャリア授業では、満足度100%を記録。「医者になりたい自分を確信した」「医療者としての興味が深まった」などの声を得た。キャリア講演会は、現地(新潟市内)とオンラインの両方で実施。市内以外も長岡市、佐渡市の中高校生が参加した。上記イベントを主催したこと

で、現状の認知度向上や地域医療の魅力発信を実現、就職率や満足度の向上につながった。一方でこれらの活動は個人活動の時間的・地理的限界が課題となった。活動量や範囲を拡大するためには、個人の努力だけではなく組織的なサポートが必要であることを痛感したことから、この成果をより大きな組織で活用することで、新潟県が抱える医師不足の課題を解決することが可能であると考える。そこで、新潟県医師会に対し、若手医師を中心とした若手支部会の設立を提案する。若手支部会としての活動は以下の3点を考える。

①「地域医療の魅力発信と次世代育成」若手医師を中心に、小中高生や医学生を対象としたイベントや情報発信を行い、地域医療の魅力を広めることで次世代の医療人材の育成に寄与する。②「多様なロールモデルの提供」地域の医師による講演を企画・共有し、若手医師や医学生が多様なロールモデルを見つめられる環境を作る。③「医師同士のつながり強化」イベントや交流会を通じて、若手医師と地域で長年勤務している医師の連携を促進し、支援体制を強化する。

多種多様な医師が参加する医師会はロールモデルが多数あると考えられるため、医師会発信のイベントで、ロールモデルを発見しやすく、新潟県での継続的な就労意欲を高めることが期待される。意見や実体験に基づき、年齢の近い医師の方が相談しやすく、自身の将来像を具体的に描きやすいため若手を中心とした。医師の縦横のつながりを強化することで、病院間の連携を図りやすく、より持続可能な医療の提供ができるであろう。支部会設立による地域ごとの差を考慮し、チャットグループを活用して適宜共有を行い、各エリアの支部運営を効率的に行う仕組みを構築していくのが

良いだろう。新潟県全土の地域医療を支える新潟県医師会内に若手医師を中心とした支部会を設立し、若手医師のエネルギーと医師会の組織力を融合させることで、地域医療の活性化と持続可能性向上に寄与することを目指す。縁もゆかりもなかった新潟県に湧いた愛着と充実した研修の恩返しを含め、若手支部会の設立と運営を行うなど今後も新潟県の医療の発展に貢献したい。

化するという悪循環が生じる。
事例…少子高齢化が進む佐賀県伊万里市にある山元記念病院では、約10年の期間をかけて、海外から4名の医師を確保することに成功した。これらの医師は、それぞれ消化器外科、循環器内科、麻酔科、救急外来で活躍し、貴重な戦力となっている。
山元記念病院が採用した外国人医師には、全員が同じ出身大学を持つという特徴があり、さらに海外で10年以上の臨床経験を有している。このため、外国人医師臨床修練制度を活用し、臨床を通じて勉強しながら日本の医師免許を取得することが可能であった。しかし、山元記念病院は研修基幹病院ではないため、2年間の臨床研修を他の施設に委託する必要がある。その後、臨床研修を修了した医師が山元記念病院に戻り、勤務を続けている。

実践…海外の医師免許を持つ医師を受け入れ、「外国人医師臨床修練制度」を活用した実績を持つ新潟県秋葉区の下越病院は、2023年4月に初めて外国人医師である私を採用した。言語の壁が完全にはないわけでもないものの、一般外来や救急外来の診療では患者に不安を与えないこと、多くの患者から次回指名の希望が寄せられるなど好評を得ている。また、地域住民を対象に多数の講演会を開催し、参加者からは「話がわかりやすく、区切りごとに質問の有無を確認していただけてありがたかった」とや「東京で経験が積んでも(専門研修)、ぜひ下越病院に戻ってきてほしい」といった声が寄せられた。

さらに、私は毎週オンラインで「日本医師国家試験交流サロン」を開催し、その影響で国内の医学部大学院留学生(京都大学、九州大学、慶應大学、順天堂大学など)や海外の医学生・医師(清華大学、上海交通大学など)から、下越病院への見学申し込みが殺到した。その中から、2024年度の臨床研修プログラムに参加する2名がマッチングを成功させた。
まとめ…外国人医師に対して特別な優遇措置を講じる「医療特区」を新設するのではなく、現行の制度を活用しながら、外国人医師が新潟県の地元住民に貢献できる環境を整え、キャリアアップニングを構築する方が望ましいだろう。

日本国内に出身地がない外国人医師でも、医師になるまで支援を受けた山元記念病院のように、専門研修のため一時的に外部の施設で経験を積んだ後でも戻ってくるのが期待できる環境を整えることが重要である。

糸魚川総合病院での初期臨床研修から考察する今後の上越地域医療のあり方

糸魚川総合病院 澤田 泰成



医療はな
くはなら
ないイン
フラであ
り、行政と並んでその地域の存続を大きく決める要素である。私は新潟県最西端にある上越医療圏に属する糸魚川市の新潟県厚生連糸魚川総合病院(糸病)で初期臨床研修をしていた。この地域は全国的に見て少子高齢化、人口減少が進んでおり、他地域のモデルになれる可能性がある。今回は私が経験した研修を一部紹介し、そこから今後の上越地域医療のあり方について考察する。

まず私が研修した糸魚川市と糸魚川総合病院について紹介する。人口は約40000人で減少傾向にある。高齢化率は「糸魚川市第3次総合計画」によると40%であり全国平均より、20年早いペースで進んでいる。立地も特殊であり、北は日本海、東西南は山に囲まれており、上越市や富山県黒部市までは高速道路で50分の時間を要し、災害

時には陸の孤島になることもある。一方で、上記「第3次総合計画」によると糸魚川市民は「地域医療体制の維持・充実」を最も求めている結果であった。糸病は糸魚川市の1、2次救急を担っているが、上記の特殊な立地から糸魚川地域で発生する多くの患者はまず当院に収容されることが大きな特徴である。この2年間、私は多くのことを学ぶ機会に恵まれたが、ここでは2つ紹介する。1つ目は糸病での研修である。診断や治療選択、3次医療機関への搬送の判断や、対話を通じて個人のニーズに応じることを学んだ。入院早期から退院後の生活を想定し、病院の枠をこえた地域との連携の重要性を理解した。限られたスタッフ、資源の中でどのように最善の医療を提供できるか、考える機会が多かった。2つ目はハワイ研修である。緑あつてホスピタリストにつき2週間研修させていただいた。ホスピタリストの標準化や質の高さを目の当たりにし、さらにハワイ州の医療体制についても教わった。印象的であったのは、

学、九州大学、慶應大学、順天堂大学など)や海外の医学生・医師(清華大学、上海交通大学など)から、下越病院への見学申し込みが殺到した。その中から、2024年度の臨床研修プログラムに参加する2名がマッチングを成功させた。
まとめ…外国人医師に対して特別な優遇措置を講じる「医療特区」を新設するのではなく、現行の制度を活用しながら、外国人医師が新潟県の地元住民に貢献できる環境を整え、キャリアアップニングを構築する方が望ましいだろう。

本が迎える問題として現代を生きる若手医師は学生時代から耳にしていた言葉である。団塊の世代が75歳を迎えるこの年は、医療の需要の高い高齢者が更に増えることで人口自体は減少するものの医療需要が高まり、従来の医療体制では対応が難しいことが示唆されてきた。このため、地域医療構想が策定された。新潟県のいくつかの地域は重点地域に指定されており、その中に佐渡市も含まれている。佐渡市では複数の病院を令和3年に統合した上で、病院の機能分化を進めることで、状況の改善を図った。しかし、佐渡は高齢化率が日本の平均を大きく上回る43%に上る地域であり、既に2025年問題だけでは検討が足りない場面が多々出てきている。日本の大多数の医療圏では、2040年に医療介護需要の高い85歳以上の人口がピークを迎えると考えられており、これまでの病院間連携だけでは太刀打ちできないことが危惧されている。この状況に既に佐渡は直面している、課題先進地域である。実際に佐渡では医療介護需要

人たちがやがて指導する立場になる。結果、組織としての標準化も進み、その地域の医療の質は上がり、研修をしたいと学生が興味をもち研修医として、という、地域住民にとって良い循環を起す。研修医・専攻医は上越地域の各病院をローテーションし、プライマリ・ケアから高度医療まで学ぶことができる。さらに各地域における医療の課題を考え、解決策を提案し、地域医療のあり方や仕組みを変えていくことができるのではないかと考えている。

高年齢者の増加や人口減少により地域の縮小化は避けられない。し

今年、2025年を迎えた。2025年問題といえは少子高齢化が進んだ日が迎えられる。団塊の世代が75歳を迎えるこの年は、医療の需要の高い高齢者が更に増えることで人口自体は減少するものの医療需要が高まり、従来の医療体制では対応が難しいことが示唆されてきた。このため、地域医療構想が策定された。新潟県のいくつかの地域は重点地域に指定されており、その中に佐渡市も含まれている。佐渡市では複数の病院を令和3年に統合した上で、病院の機能分化を進めることで、状況の改善を図った。しかし、佐渡は高齢化率が日本の平均を大きく上回る43%に上る地域であり、既に2025年問題だけでは検討が足りない場面が多々出てきている。日本の大多数の医療圏では、2040年に医療介護需要の高い85歳以上の人口がピークを迎えると考えられており、これまでの病院間連携だけでは太刀打ちできないことが危惧されている。この状況に既に佐渡は直面している、課題先進地域である。実際に佐渡では医療介護需要

人たちがやがて指導する立場になる。結果、組織としての標準化も進み、その地域の医療の質は上がり、研修をしたいと学生が興味をもち研修医として、という、地域住民にとって良い循環を起す。研修医・専攻医は上越地域の各病院をローテーションし、プライマリ・ケアから高度医療まで学ぶことができる。さらに各地域における医療の課題を考え、解決策を提案し、地域医療のあり方や仕組みを変えていくことができるのではないかと考えている。

高年齢者の増加や人口減少により地域の縮小化は避けられない。し

今年、2025年を迎えた。2025年問題といえは少子高齢化が進んだ日が迎えられる。団塊の世代が75歳を迎えるこの年は、医療の需要の高い高齢者が更に増えることで人口自体は減少するものの医療需要が高まり、従来の医療体制では対応が難しいことが示唆されてきた。このため、地域医療構想が策定された。新潟県のいくつかの地域は重点地域に指定されており、その中に佐渡市も含まれている。佐渡市では複数の病院を令和3年に統合した上で、病院の機能分化を進めることで、状況の改善を図った。しかし、佐渡は高齢化率が日本の平均を大きく上回る43%に上る地域であり、既に2025年問題だけでは検討が足りない場面が多々出てきている。日本の大多数の医療圏では、2040年に医療介護需要の高い85歳以上の人口がピークを迎えると考えられており、これまでの病院間連携だけでは太刀打ちできないことが危惧されている。この状況に既に佐渡は直面している、課題先進地域である。実際に佐渡では医療介護需要

人たちがやがて指導する立場になる。結果、組織としての標準化も進み、その地域の医療の質は上がり、研修をしたいと学生が興味をもち研修医として、という、地域住民にとって良い循環を起す。研修医・専攻医は上越地域の各病院をローテーションし、プライマリ・ケアから高度医療まで学ぶことができる。さらに各地域における医療の課題を考え、解決策を提案し、地域医療のあり方や仕組みを変えていくことができるのではないかと考えている。

高年齢者の増加や人口減少により地域の縮小化は避けられない。し

今年、2025年を迎えた。2025年問題といえは少子高齢化が進んだ日が迎えられる。団塊の世代が75歳を迎えるこの年は、医療の需要の高い高齢者が更に増えることで人口自体は減少するものの医療需要が高まり、従来の医療体制では対応が難しいことが示唆されてきた。このため、地域医療構想が策定された。新潟県のいくつかの地域は重点地域に指定されており、その中に佐渡市も含まれている。佐渡市では複数の病院を令和3年に統合した上で、病院の機能分化を進めることで、状況の改善を図った。しかし、佐渡は高齢化率が日本の平均を大きく上回る43%に上る地域であり、既に2025年問題だけでは検討が足りない場面が多々出てきている。日本の大多数の医療圏では、2040年に医療介護需要の高い85歳以上の人口がピークを迎えると考えられており、これまでの病院間連携だけでは太刀打ちできないことが危惧されている。この状況に既に佐渡は直面している、課題先進地域である。実際に佐渡では医療介護需要

2025年問題の先へ 2040年の世界からの提言

佐渡総合病院 芳中 亮太



今年、2025年を迎えた。2025年問題といえは少子高齢化が進んだ日が迎えられる。団塊の世代が75歳を迎えるこの年は、医療の需要の高い高齢者が更に増えることで人口自体は減少するものの医療需要が高まり、従来の医療体制では対応が難しいことが示唆されてきた。このため、地域医療構想が策定された。新潟県のいくつかの地域は重点地域に指定されており、その中に佐渡市も含まれている。佐渡市では複数の病院を令和3年に統合した上で、病院の機能分化を進めることで、状況の改善を図った。しかし、佐渡は高齢化率が日本の平均を大きく上回る43%に上る地域であり、既に2025年問題だけでは検討が足りない場面が多々出てきている。日本の大多数の医療圏では、2040年に医療介護需要の高い85歳以上の人口がピークを迎えると考えられており、これまでの病院間連携だけでは太刀打ちできないことが危惧されている。この状況に既に佐渡は直面している、課題先進地域である。実際に佐渡では医療介護需要

人たちがやがて指導する立場になる。結果、組織としての標準化も進み、その地域の医療の質は上がり、研修をしたいと学生が興味をもち研修医として、という、地域住民にとって良い循環を起す。研修医・専攻医は上越地域の各病院をローテーションし、プライマリ・ケアから高度医療まで学ぶことができる。さらに各地域における医療の課題を考え、解決策を提案し、地域医療のあり方や仕組みを変えていくことができるのではないかと考えている。

高年齢者の増加や人口減少により地域の縮小化は避けられない。し

今年、2025年を迎えた。2025年問題といえは少子高齢化が進んだ日が迎えられる。団塊の世代が75歳を迎えるこの年は、医療の需要の高い高齢者が更に増えることで人口自体は減少するものの医療需要が高まり、従来の医療体制では対応が難しいことが示唆されてきた。このため、地域医療構想が策定された。新潟県のいくつかの地域は重点地域に指定されており、その中に佐渡市も含まれている。佐渡市では複数の病院を令和3年に統合した上で、病院の機能分化を進めることで、状況の改善を図った。しかし、佐渡は高齢化率が日本の平均を大きく上回る43%に上る地域であり、既に2025年問題だけでは検討が足りない場面が多々出てきている。日本の大多数の医療圏では、2040年に医療介護需要の高い85歳以上の人口がピークを迎えると考えられており、これまでの病院間連携だけでは太刀打ちできないことが危惧されている。この状況に既に佐渡は直面している、課題先進地域である。実際に佐渡では医療介護需要

編集後記

今回の勤務医ニュースは「令和6年度新潟県医師会研修医奨励賞」の最優秀賞及び優秀賞を受賞された4人の先生方に「研修医から医師会への提言」を寄稿いただきました。

いづれの原稿も、私自身の研修医時代とは雲泥の差というほど積極的な地域医療と関わり、実践されている先生方の活動に驚きとわくわく感を覚え、行間から溢れる熱量とパワーに圧倒されながら、一気に読んでしまいました。

提言の内容も、若手支部会の設立と地域医療活性化・持続可能性に向けた組織的な活動、外国人医師の活用と環境整備、医療の集約・分業と教育体制の確立、病診・福祉の連携とデジタルツールや社会資源の活用など、多様な具体性のあるものでした。県医師会もタッグを組んで未来の地域医療をぜひ一緒に創っていきましょう。(関)